

# 学習者の実態に沿った「特別の教科道徳」の教材開発・実践

－ 道徳的な知識を対話の軸においた道徳科授業 －

若森達哉

(奈良教育大学附属中学校)

橋崎頼子

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育課程・教育方法))

森本弘一

(奈良教育大学 理科教育講座 (理科教育))

竹村景生・佐竹 靖・辰巳喜美・長友紀子

(奈良教育大学附属中学校)

Development and practice of teaching materials of special subject morality in line with learners' realities:

Moral education with a focus on dialogue using moral knowledge

Tatsuya WAKAMORI

(Junior High school attached to Nara University of Education)

Yoriko HASHIZAKI

(Department of School Education, Nara University of Education)

Kouichi MORIMOTO

(Department of Science Education, Nara University of Education)

Kageki TAKEMURA, Yasushi SATAKE, Kimi TATSUMI, Noriko NAGATOMO

(Junior High school attached to Nara University of Education)

**要旨:** 本稿では次年度より実施される「特別な教科道徳」の授業に向けて、対話を軸とした授業構造について、授業実践を振り返る。芥川龍之介の「鼻」を題材とし、人間心理への知識を理解することで、学習者に自己理解を深めさせた。道徳科における感覚的な判断と、思考を通じた判断のずれを学習者に体感させ、思考し続ける姿勢を身に付けさせる試みである。また、学習者の実態に沿った道徳科における対話の進め方について思索した。

**キーワード:** 対話 dialogue  
道徳的知識 moral knowledge  
自己理解 self-understanding  
感性 sensibility

## 1. はじめに

### 1. 1. 本校における道徳教育の今まで

本校はE S D教育を軸として道徳教育を進めてきた経緯がある。教科や行事を通して道徳的な価値観を養い、実践を行ってきた。例えば、本校の学習者は第三学年で行われる沖縄修学旅行では、学習者一人一人が平和や、人権について考え文章として記録するなど、個人の考えや思想を大切にしつつ、これからの国際理解や、自分たちの価値観の見直し、他者との関わりによる価値観の変容について考えてきた。次世代の担い手としての責任と課題について考え、今できることについて考えることを行事や日々の授業の中で行ってきた。これらの実態や、系統を継承しつつ、

新指導要領の内容を踏まえ、教科としての道徳をいかにして組み立てるかという点について本実践では述べる。

### 1. 2. 本実践におけるねらい

本実践は学習者が解決しがたい課題に他者との共同で取り組むことで、自己の価値観を見直し、よりよく生きるために思考する方法について思索する。学習者の語りを通して、学習者の内面がどのように変容したかについて考察し、次年度からはじまる道徳科における話し合いへの示唆を得る。特に自己と他者の価値観の間のズレを用いた自己理解、自己変容を表出させる方法について述べる。また、道徳科の授業モデルの提案と実践およびその検証を行う。

## 2. 本文について

### 2. 1. 本実践における道徳的な知識の重要性

本実践では、道徳科における学習の構造を「知性」と「感性」を基盤として見直す。

従来の物語を読んで感銘を受ける道徳や、人物の伝記を読んで感慨にふける道徳は「感性」が中心の道徳であった。それらは道徳的心情に重きを置き、学習者の心に語りかけ、行動面への変容を期待する道徳であった（図1）。

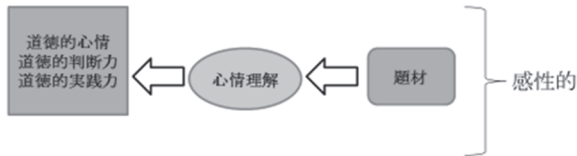


図1 新指導要領以前の道徳

しかし、この道徳授業形態で学習者が学び得ることは、学習者の心に響く場合もあるが、道徳的实践にまではたどり着きたいものだった。物語に感動することはあっても、直接生き方への変容につながりにくいというのは学習者のみならず、大人にとっても同様である。また、物語の性質上、価値観の押しつけになりやすいケースも少なくはない。物語や伝記に出てくる人物の行いに焦点を当て、このように生きるべきだという押しつけが存在しやすい。これは多様な価値観を生み出すものではなく、特定の価値観に統一させようとする働きに近い。これらの改善として、対話による思考が重要性を増した。対話とは「知性」を用いた学習方法である<sup>1)</sup>。

対話は話し合うことで問題解決を行う方法である。感情的ではなく思考によって問題解決を行おうとする方法である。

話し合いの場において、話者が語る意見や思想は個人の価値観の表出である。そして個人の価値観は、個々の体験が基盤になっている。学習者がその体験と何かしらの価値をつなげたときに、それは理由づけられ、語られる。理由づけられた価値観を話し合うことで他者との価値観にズレを認識し、自分の価値観について考え直したり、他者の体験を共有したりすることで新たな価値に気付くことができる。価値観の変容や、多様性への気付きは、道徳的心情の発達や、道徳的判断力、道徳的实践力の向上に結びつく（図2）。

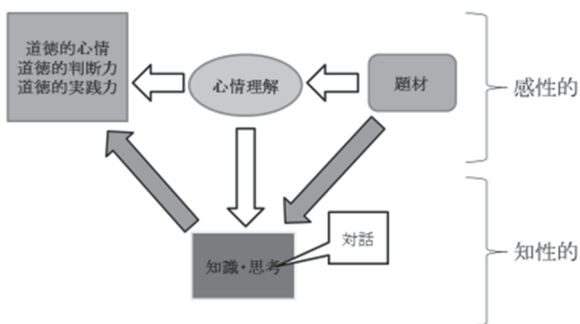


図2 本実践における道徳科の構造

しかし、学習者の実態として、対話の活動を通して、思考よりも感情がはたらいっている場合が多い。一見話し合いをしているように見えても、感情的になっている場合が多く、思考できていない場合がある。結果として価値観の変容にまで結びつくことは少ない。話者にしても聞き手にしても、思考的な判断よりも感覚的な判断を行うのが実態である。

学習者が適切な対話を行う上では、心情を基盤とした「感性」を大事にしつつ、思考・知識を基盤とした「知性」を育まなければならない。この課題に対して本実践では「道徳的な知識」を鍵のひとつとして提案する。

道徳科の授業を行う上で、思考の自由は保障されるべきであるが、揺るがない事実があることも学習者は学びとるべきであると考えられる。揺るがない事実とは人権であったり、人間の心理構造であったりする。これらを「道徳的な知識」として以下に整理する。

#### 道徳的な知識

- ①基本的な人権に関するもの
- ②人間心理に関するもの

①については道徳科の授業のみならず、社会的にも、学校教育、生活、また家庭において認知される項目であるが、学習者は感情的になった場合、意識されなくなることも事実である。そのことからこれらの知識は、授業内において繰り返し揺るがない事実として伝えなければならない。道徳科において学習者は「どのような思想・発言も自由」なのではなく、「自分・他者を傷つけたり、権利を侵害したりしない限りにおいて、どのような思想・発言は自由」なのである。

②については、人間の思考方法など心理学的な側面を含むものである。例えば、人間の行動原理や、葛藤という心理状況の理解、学習者があまり意識、または認知していない、人間の思考のクセや偏りなどについての知識である。例えば、いじめの四層構造などがこの知識にあたる。自分がどのような立場でどのようにいじめに関わってきたかを考えるとき、構造を知るのと知らないのとでは自己理解に差が生じるのは知識の重要性の証明である。

これらの道徳的な知識は授業で扱われるものとして捉えたときに、学習者の話し合いの核心にあるものでもある。人権そのものが話し合いの題材につながることはもちろん、人間心理も話し合いの題材となる。本実践はこれらの道徳的な知識を意識して現状学習者、指導者ともに陥りやすい「感性的」な話し合いから、より「知性的」な話し合いを目指したものである。

## 3. 実践について

### 3. 1. 題材

本実践では『鼻』芥川龍之介著を題材として扱った。この作品には二つのテーマが掲げられている。一つはコンプレッ

クスを抱えた人物の苦悩である。特に、それは人物の容姿に関するものであり、物理的に解決する方法は困難であるということが特徴である。また中心人物は仏門に帰依した者であり、そのような人物が外観に対してコンプレックスを持つと言うところにテーマ設定のレトリックがある。もう一つのテーマとして、同情と敵意の問題が存在する。「——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。ところがその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこっちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸におとし入れて見たいような気にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる(本文引用)」に表現されたように人間の心の抱える矛盾が描かれている。本実践ではこれらのテーマを題材として扱った。他者が課題と向き合うとき、どのような関わり方をするべきかを通して自らの思考について考えさせることが本実践でのねらいであった。これらの課題に向き合う当事者としての生き方・考え方、また他者としての生き方・考え方について思考させ、自己への理解を深める姿勢を育むことを重視した。人間心理に関する知識として、『鼻』に表出する「傍観者のエゴイズム」を取り扱った。

「傍観者のエゴイズム」とは問題を抱えた者を見たときに、気の毒だと感じる一方、その人物が困難を克服したり、解決したりすると味気なさを感じる矛盾した心のことである。基盤にあるのは、人間関係において無意識に作り上げた他者との上下感覚が生み出す、自分本位的な心情である。これを学習者に気付かせることで、自己の行動の振り返りを行うことで、よりよい他者との関係の築き方について考えさせるきっかけとして設定した。

### 3. 2. 展開計画

#### (1) 本授業の目標

よりよい人との関わり方について考えることを通し、自己への理解を深める姿勢を育む。

#### (2) 本時の評価

自己を見つめなおす中で自分自身の課題や、良い点について向き合っているか。

自己理解や、より良い生き方について考えを深めることができているか。

#### (3) 表1 学習展開過程<sup>2</sup>

指導内容	学習活動	指導上の留意点と評価 (○留意点●評価)
○本時の展開について説明する。	○本時の展開とワークシートを確認する	○ワークシートを確認させる
○アニメーションで物	○人物の設定や課題な	○話の問題点はどこにあるかを理解させる。

<p>語のあらすじを読み取らせる。</p> <p>○「困っている僧にどのような励ましをするか」をワークシートに記入し、ロールプレイを行わせる。</p> <p>○本文後半の「傍観者の利己主義」について考えさせる。</p> <p>○改めて「困っている僧にどのような励ましをするか」をワークシートに記入する。</p>	<p>どを理解する。</p> <p>○ワークシートに沿って記入する</p> <p>○ロールプレイを行う</p> <p>○感想を発表する。</p> <p>○中心発問「どうして他者の成功や幸福に対して攻撃的な感情や馬鹿にするような感情をもつのか。」について考える。</p> <p>○発表を行う。</p> <p>○ワークシートに沿って自分の考えを見直しながら記入する。</p>	<p>●自分の考えをワークシートに記入できているか</p> <p>●自分の考えをワークシートに記入できているか</p> <p>●感想を記入することができているか。</p> <p>○「改めて」については書けなくてもよいこと伝える。</p>
<p>○ワークシートに振り返りを記入する。</p>	<p>○ワークシートや、授業の内容をふまえて振り返りを行う。</p> <p>(○時間があれば複数人発表を行う)</p>	<p>●自分の考えをワークシートに記入出来ているか</p>

ワークシートを通して、思考を行うことでどのような変容が発生するかを学習者が認知できるようにした。本実践では不幸を抱えた人物に対する励ましを思考の対象として取り扱った。直感的に不幸を抱えた者への励ましと、自分の心理背景、相手の心理背景を思考した上での思考を通して励ましには、どのような変化があるかを考えさせた。

#### 4. 成果と課題

##### 4. 1. 学習者の振り返りから

「友達からコンプレックスの相談をされたときに、励ますことの難しさを実感したことがある。はげましは逆に相手を傷つけてしまうことがある。良い言葉をかけることばかり考えていたけれど、上下をつくらず、対等な立場に立つことが、相手の悩みを軽くすることができるのではないかと思う。」

この学習者は、自己の体験と結びつけて思考していた。最初、内供<sup>3</sup>に対し「個性的だね。誇りを持って」という励ましの言葉を準備した。しかし、背景にある上下関係を認識することによって、改めて内供に声をかける内容を考えた際、「何もかけることができない。」と記述していた。

思考を通せば、問題に丁寧に向き合うことになり、かえって答えが出せなくなることがある。感性から知性的な思考への移行がここに存在したのではないだろうか。学習者にとって、その場における最善解が出されることも重要だが、それ以上に、学習者にとって今後も考え続ける価値のある課題となりえたならば、主体的に学び続ける姿勢につながる価値があるのだと認識できた。課題解決の対話を意識して実践したが、道徳科における課題の多くは答えが一つではないことを踏まえれば、必ずしも課題解決がなされる必要がなく、解決していこうという姿勢を育むことがむしろ本質である。課題意識をもつこと、課題解決の姿勢をもつこと、課題解決のために思考すること、課題解決のために他者との協力を基盤とすること、これらが道徳科における対話を通した問題解決学習の基盤であろう。

また「エゴがあることを知っても、やはり私は声かけの方法を変えません。みんな同じじゃなくて良いから気にする必要はないと声をかけます。それが私は正しいと思うからです。間違ったり、傷つけたりしたならば、そのときにちゃんと謝れば良いと思います。」と述べた学習者がいた。この学習者にとって意見の変容はなかったわけではあるが、もともと持っていた意見を大切にすることを選んだ。課題解決のため、他者との話し合いを通して、よりよい解決策を思考するが、一時的な最善解を探すことがその場で必要とされる。話し合った結果、自らの意見を変えない学習者もいる。授業者は、評価の観点を意識しすぎ、変容ばかりを意識していたが、本当に重要なのは結果を出すまでの過程であることを再認識させられた。今後の課題として、学習者の思考のプロセスを、授業者がいかにして読み取っていくかという点が挙げられる。

##### 4. 2. 道徳科における対話の課題について

様々な題材での道徳科授業内で対話学習を行うとき、学習者に決まりを示す必要があると考えられた。本校では国語科においても対話する機会のある授業は多い。国語科での話し合いの主な決まりを以下に示す。

- ① 相手が話しているときは最後まで話を聞くこと。
- ② 個々の意見を出し合って出来るだけよりよい意見に統合できるようにすること。
- ③ 班の人が全員参加するために、話せていない人にも発言を促すこと。(例外あり)

国語科では話し合うことで意見の質を高め、問題解決を行うことを第一優先事項としているのでこのような話し合いの決まりを設けていた。また学習者にとって、指導者は国語科を担当していることもあり、無意識に国語科での話し合いに近い方法で話し合いを行っていた。

国語科の話し合いの決まりが道徳科の授業でも意識されたことにより、課題が発生した。特に②、③に関する課題が生じた。道徳において答えは明確に存在しない場合が非常に多い。それにも関わらず②のように班で意見を統合するために動くことは非常に危険である。それは価値観の統一をはかることとなり、多様な考えを認め合うという前提と反対の内容となる。加えて③については、発言の強要になる。道徳科の授業を行う上で環境作りとして大切なことは何より、安心感である。思ったことの何を話してもいいという安心感が素直な個人の価値観を表出させる。それにも関わらず③の決まりは、話さなければならないという強制感がある。これもまた安心感とは、反対に位置するものになりかねない。これらの問題点を受け道徳科の話し合いの決まりを新しく考え直す必要があった。問題解決のための道徳科の話し合いの決まりを以下に示す。

- ① 自分や他の人を傷つけたりする事以外は何を言ってもいい。
- ② 茶化したり、否定したりしてはいけない。
- ③ 発言せず、聞いているだけでも良い。
- ④ 疑問に思ったことは是非問いかけること。
- ⑤ 話をまとめなくてもいい。

①については、基本的人権の観点から作成している。②についても基本的には①を土台としているが、否定しないというところに重点をおいている。自由の保障や安心感を生み出すために話し合いの場から、意見の否定を禁じている。③に関しても安心感できる話し合いの場を作るためである。話をしっかりと聞く中で、自分を振り返ることも重要である。また、場面緘黙の学習者にとっての配慮を踏まえている。④に関しては、対話は問答を基本とすることを学習者に意識づけるために決まりに入れた。学習者が個々別々に気付く疑問こそ、学習者が現状の段階で認識した道徳的な問題である。⑤に関しては多様な価値観が存在することを学習者に意識付けするため。また、容易に解決しないからこそ普段から意識しなければならないことを認識させるためである。

これらは哲学対話として様々な実践が行われているが、そのさいの話し合いの行い方を参考に組み立てた。哲学対話と道徳科の目的や構造は、違うものではあるが、簡単には答えがない

もの、または答えがないものを話し合いによって見つけ出すという点において共通する部分もあり参考となり得た。

#### 4. 3. 授業構造の課題

本実践が目標とした感覚的選択・行動（感性）から、思想的選択・行動（知性）への移行、変容による自己理解の深まりに関しては、未完成な部分も多くあるが課題としての価値を多く有する。ワークシートの構造や、記述内容、発問内容によって感性と知性の往来を、より適切に、効率的に引き出す方法を今後の研究課題とする。

また道徳的知識の枠組みや、系統についての整理が今後の課題となる。道徳教材、題材が有する、知恵、知識的部分を系統立てて整理し、内容項目とどのような関係性を持つかを整理することが課題である。

#### 注

- 1) 「相互に問題を解決しようと努力する中で、各人が自己の最善の選択理由を示し、かつ人が理由に耳

を傾ける過程」である。それによって「互いの承認しうる合意に到達することを目指す」のである。」荒木寿友,2013 (p179,180) と述べており、これは本実践における対話の目指すところと同じである。

- 2) 授業展開や授業目標は荒木寿友,2018 を中心に他の参考文献を参考にして実践を行った。
- 3) 内供とは『鼻』芥川龍之介著の中心人物である。

#### 参考文献

荒木寿友 (2018) ,ゼロから学べる道徳科授業づくり,明治図書出版.

荒木寿友 (2013) ,学校における対話とコミュニティの形成,三省堂

堀田和秀 (2018) ,道徳教科書フル活用！楽しい道徳の授業プラン,学芸みらい社